

山の百名花

遠足員 甲申 瑛子

【53】シモツケソウ

霧ヶ峰が好きで、夏になると毎年のように出かけていた頃があった。

ニッコウキスゲが草原一帯をオレンジ色に染め、登山客や観光客で賑わう七月よりも、どちらかというと路線バスの本数も減る八月頃のほうが好きで、初めは娘とともに、後には一人でよく訪れた。

七月頃はキスゲに目を奪われて他の花があまり目に入らないが、この頃になるとマツムシソウ、ヤナギラン、ヨツバヒヨドリ、シラヤマギクなど、キスゲの陰でこんなにたくさんの花が出番を待っていたのかと驚かされるくらい花の種類が増える。

そしてまたその頃になると、霧ヶ峰に行くとき必ず立ち寄っていたコロポックルヒュッテのそばの車山湿原は、薄紅色のシモツケソウの大群落で覆われる。中でも紅色が一段と鮮やかなアカバナシモツケがこの付近には多く、あたり一面を覆うアカバナシモツケの濃いピンクは、なぜかその明るいかなやかな色彩がかえって夏の終わりの哀

しさのようなものを感じさせた。

もしかしたら夜店の綿菓子に似たこの花を見てみると、子どもの頃、残り少なくなつた夏休みの日数を数えて、片づけなければならぬ宿題の膨大さに重い心を抱えながら、無為に過ごした夏の日々を後悔とともに思い起こしていたときの記憶がよみがえるせいかもしれない。



【54】サラシナショウマ

トリアシショウマ、アカショウマ、ヤマブキシヨウマなど、ショウマと名のつく花は多い。いずれも伸びた茎の先に白い小花が集まって付くが、円錐形の花序になる花が多いのに対して、サラシナショウマの花

はびん洗いのブラシを連想させる円筒形の穂状になるので、簡単に見分けがつく。

ある本にこの花が「何か妖しい気分を漂わせる」と書いてあったのを読んで、なるほどと思ひあたるような経験をしたことがある。

そのとき私は娘と二人、霧ヶ峰から八島高原に向かって歩いてきた。車山の肩のあたりで急に降り出した雨は激しさを増し、八島ガ池にさしかかったときは、まだ三時頃というのにあたりは薄暗かった。

池の脇の木道を歩きながら、池とは反対側の斜面にふと目をやって、思わずはっとした。暗い木立の間に浮かぶように、無数のサラシナショウマの白い花が小刻みに揺れていた。神主が左右にはらう御幣のように、風もないのに音もなくかすかに揺れていた。まさに妖しいという表現がぴったりするような目の前のシーンから目をそらすことができずに、私も娘もしばらくは言葉もなく、じっとそれを見ていた。

その後、薄暗い林の中に咲くサラシナショウマに出会うたび、このときのこと鮮やかに思い出される。